

経営科学国際コロキウムについて

秋 葉 博

経営科学国際コロキウム (Management Science Colloquium, Osaka) は昭和47年からすでに6回、毎夏大阪大学経済学部経営科学グループの主催によって開催されている。

この会議へのこれまでの参加者は延 150 人ほどに達しているが、非公式な会合に倣しているため会議の内容はもとより、その存在すらも一般にはあまり知られていないのが実情であろう。

ここではその沿革、活動状況の一端を紹介し、このような会議の在り方について各位の御批判を得て今後の活動の指針としたい。

発 端

昭和46年春カナダのブリティッシュ・コロンビア大学の L. G. Mitten 教授から大阪大学経済学部の横山保教授あてに経営科学分野における日加両国間の交流を深めるため交換学生を求める趣旨の来信があった。

同教授は当時研究の手軽な国際的交流方式を求めて模索中であった同学部の大沢豊、福場庸、宮本匡章各教授と相談した結果、単なる交換学生方式では対象も限定され、学界に裨益する効果も少ないと考え、これを機会に小規模で親密な雰囲気のとれる国際会議をもつことはできないかということになった。同教授団はこの企画を以前から学術奨励に強い関心を示し各種の後援、奨励策を実行している関西経済研究センターに相談し資金的な援助を要請することにした。

同センターは早くから経営科学に深い理解を示していたが、以下のような理由から、この企画に賛同され、ここに資金的裏付を確保することができた。*

その理由とは従来の国際交流の多くが諸外国の資金をあてに、その援助を期待して成立してきた点を反省し、たとえ規模は小さくても、日本の資金によって海外のすぐれた研究者を招聘し、些少でも諸外国の過去の好意に報い、同時にそれが日本の学問の進歩、学界の発展に寄

与できるなら誠に結構である。

さらに通常の国際会議のように大規模かつ公式的な会議と異なり、小数の参加者が親しく意見交換できる場を提供することによって、日本の科学者と各国の科学者との間にいっそう親密な関係を樹立することができるだろう。

上述のような形で資金的な目処が得られたので同教授団は Mitten 教授の業績にくわしい福場教授を中心に会議の具体的企画に移った。一方 Mitten 教授には、その趣旨を報告し協力を要請したが、快諾の返事とともに参加者として同教授のほか、予算シミュレーションの開発者として名の高い R. Mattessich 教授を推薦したい旨連絡を受けた。これによって日本側の発表者、発表論文の詮衡に移り14人10論文が選定された。

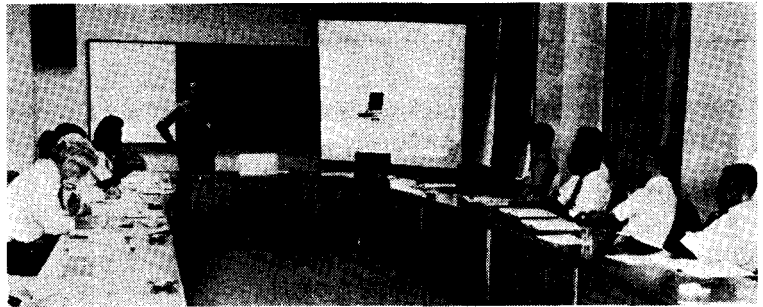
かくて第1回のコロキウムは昭和47年8月29日から3日間京都のホテル フジタで開催されることになった。

会議の形式等

会議にさきだち、会議の目的、構成、内容などについて繰り返し検討が加えられ、ほぼ以下のような台意が成立した。

1. 名称：Management Science Colloquium, Osaka とする。(公式的な会議と異なり、小人数の親密な学術的会議であることを強調するために Colloquium という言葉が選ばれた)
2. 構成：以下の構成員による非公開会議とする。
 - (i) 海外からの招待発表者 2名

* この資金は関西経済研究センターの性格上、継続事業として確定されたものではなく、毎年研究計画を提出し、その承認を得てはじめて提供されることになっている。この細務はすべて大阪大学の同教授団によって行なわれており、その地味な努力に対し厚く敬意をあらわしたい。



- (ii) 関西地区以外からの国内の招待者 3~5名
- (iii) 関西地区の参加者 15名程度

3. 会議方式：

- (i) 発表者は事前に発表内容を詳述した論文(英文)を作成し、参加者全員に配布するものとする。
- (ii) 各発表に対して事前に討論者を予定するが、形式ばらずに、自由に討議できるような雰囲気を保つ。
- (iii) 発表、討論はすべて英語で行なう。

4. その他：会議の趣旨を生かすため、会議期間中全員がホテルに同宿し、文字通り寝食をともにして親しく交流する。

発 展

第1回の会議が成功裡に終わったため、つづいて第2回会議が企画された。この会議では初回の会議の反省にもとづいて以下のような修正が加えられた。

(1) 第1回会議は発表論文数が多すぎて十分な討論が行なえず、実際的にも気持ちのうえでも気忙しい会議となったため発表論文を若干減らして日程にゆとりをもたせる。

(2) 第1回の発表内容が数学理論的なものから、生産、コンピュータの応用、会計と多岐化していたため、やや主題を絞り、参加者の関心を高める。

この2年間の経験によって第3回以降の運営方式に、

表 1 経営科学国際コロキウム招待発表者

回数	主 題 目	諸 外 国 からの 招 待 発 表 者	会 議 場	企 画 担 当*
1	特 定 せ ず	Loring G. Mitten (University of British Columbia) Richard Mattessich (同上)	ホテル フジタ	福 場
2	意思決定の理論と 実際的应用	Loring G. Mitten (同上) G. A. Feltham (同上)	ホテル フジタ	福 場
3	特 定 せ ず	Richard M. Cyert (Carnegie-Mellon University) Morris H. De Groot (同上) Sheridon M. Ross (University of California, Berkeley)	NCB 会 館	坂 口 田 畑
4	マーケティングに おける経営科学	Lee G. Cooper (University of California, Los Angeles) Peter L. Wright (Stanford University)	NCB 会 館	大 沢 片 平
5	特 定 せ ず	W. S. Jewell (University of California, Berkeley) E. Zabel (University of Rochester)	NCB 会 館	西 田 田 畑
6	生産とロジスティ クスにおけるOR	Lynwood A. Johnson (Georgia Institute of Technology) Douglas C. Montgomery (同上)	NCB 会 館	秋 葉 真 鍋

* すべての企画に大阪大学経済学部、横山、大沢、福場、宮本(匡章)教授が参画している。

表 2 第 6 回経営科学国際コロキウム発表論文

論 文 名	発 表 者
生産システム工学の概念（製造技術と生産管理の統合的アプローチ）	人 見 勝 人（大 阪 大）
多製品、多組立ラインの負荷と人員配置のためのヒューリスティックな方法	黒 田 充（青 山 学 院 大）
生産・配給活動の統合と最適化法	D. C. モントゴメリ（ジョージア工大）
生産と配給システムの設計に関連する 2 つのネットワーク・モデル	刀 根 薫（埼 玉 大）
最適化法を用いた資材所要量計画システムの拡張	L. A. ジョンソン（ジョージア工大）
リサイクリング問題に対する還流時間分布の応用	藤 田 精 一（名 古 屋 工 大）
機械スケジューリング問題の近似解法	山 本 正 明（法 政 大）
商標選択行動におけるエントロピー（商標-商店 モデル）	坂 口 実（大 阪 大）

さらに改善が加えられた。まず海外からの招待者をブリティッシュ・コロンビア大学以外からも自由に選択できるようにし、コロキウムの主題についても参加者が限定されないように数学理論的なものと OR の応用に関するものを 1 年おきに繰り返すことにした。

この結果、表に見られるように第 2 回の「意思決定の理論と実際の応用」につづいて第 4 回は「マーケティングにおける経営科学」、第 6 回は「生産とロジスティクスにおける OR」が選ばれている。

これと並行して第 1、第 2 回は単なる資金的援助にとどまっていた関西経済研究センターが運営面にも協力することになり、会場を関西経済連合会の会議室に移し、会議にまつわる各種の事務のほか、パーティーや食事の世話にも携っていただくことになった。これによって会議中の雑事から大学関係者の手を省くことができ、会議の運営はいっそう円滑に行なわれるようになった。

以上が発生から現在までのおおよその経過であるが、参考のために毎年の会議の主テーマ、海外からの招待発表者および第 6 回コロキウムの発表論文の名称と発表者名を表 1、表 2 に示した。

会議の成果ほか

会議の成果としては会議場で発表される論文の内容およびその討論から得られる直接的利益だけでなく、海外の経営科学者が現実問題に対してもっている深い理解、彼らの積極的な生活態度、とくに会議場における活発な発言など、いろいろな面で日本の学者には刺激となることが多い。

またこの会議における接触を契機として伊藤駒之神戸大学助教授がブリティッシュ・コロンビア大学に、真鍋龍太郎神戸商科大学助教授がカリフォルニア大学パークレイにそれぞれ招聘されているが、これもこの会議の大

きな成果であるといえよう。

このような成果に対して、問題点もいくつか指摘できる。さきにも述べたように各発表者は詳細な論文を会議に提出し、参加者に配布するが、その内容を含めて討論の結果が一般に公表されることなく終わっている。このような会議の議事録を手軽に発行できるシステムが存在しない。とくにこの会議の場合のように英語で書かれた論文集を国内だけでなく海外にも安価にタイミングよく提供できるシステムが確立されることを期待したい。

第 2 の問題点は、国際会議には常についてまわる会話能力の問題である。参加者を小人数に絞り、気楽な雰囲気を保つよう努力しているとはいえ、会議の場で英語を自由に駆使して意思を十分伝達する能力をもつ人は学者のなかでもそれほど多くない。パーティーや休憩時間中の自由交歓が会議室での意思の疎通を補うとはいえず、会議における討議の範囲が限られてしまうのは、やむを得ないことであろうか。*

大阪大学では第 7 回の企画が進行している。本稿が掲載されるころにはほぼその内容も固まっているであろう。

（謝辞） この会議に対しきびしい環境のなかで 6 年間にわたり財政的援助をいただき、さらに会議の運営についても数々の便宜をはかっていただいている関西経済研究センターに誌上を借りて深く感謝の意を表明し、この紹介の結びとしたい。

（あきば・ひろし 神戸商科大学）

* 本会議についての御意見、お問合せは、豊中市待兼山 1 の 1 大阪大学経済学部、経営科学国際会議プログラム委員会（代表横山保教授）宛御提出くださるようお願いいたします。